

【優秀賞】

「想いをつなぐということ」

立命館慶祥中学校
1年 白間 あかね

「日本国旅券」と書かれたパスポートの三ページ目。そこには「日本人が行くことの出来ない場所は世界中のどこにもない。」と記されています。しかし、そのパスポートを持っていても、最も訪れることが難しい場所があります。それは、歴とした日本の領土「北方領土」です。

北方領土と聞いて頭に浮かんできたのは、四島の名称と暗記した条約の年号だけでした。図書館で北方領土に関する本を探してみるとほんの数冊、しかも古く黄ばんだ物ばかりでした。難しい言葉が沢山並んでいて、初めの一ページだけでも理解することが難しく、さっぱり読み進みません。小学生向けのマンガ本が、学び初めの私には解りやすく、また、政府広報オンラインもとても興味深く、北方領土についてもっと学ばなくてはいけないと強く思うようになりました。

二〇一六年の調査で、四島には約一万七千人が生活を送っています。もちろん、その中に日本人はいません。水産業、加工業を主として栄え、幼稚園には楽しく遊ぶ子供達の笑顔があふれているそうです。四島の中で生まれ育ったロシア人の人々にとって、北方領土は「ふるさと」なのです。

少しでも知りたいと思い、歴史上の事ばかり調べていた私。しかし、調べ進めていくうちに、知るべきことは目に見えるものだけではなく、人々の想いではないのだろうかと思うようになりました。

北方四島交流事業であるビザなし交流で、現地に行くことが出来る人数は年間約二百五十人。日本人の存在を示し、返還の意志を伝え続けるためにも継続していかなければならないと思います。しかし、実際に四島の地を踏んだ人々の想いだけで終わるのではなく、より多くの人々が問題意識を持ち、双方の考えや想いを共有していくことが必要なのではないのでしょうか。

北方領土について関心を持ち、世論を作っていこうと活動している学生が全国には沢山います。その活動をもっと身近に知ることが出来れば、一人でも多くの人に感心を持ってもらう事が出来るはずです。私もその一人として、まずは情報として頭に、そして実際に北方領土の地を踏み、人々の想いに耳を傾け、心に刻んでいきたいと思っています。

根室の納沙布岬の少し手前には、「望郷の家」があります。元島民の方々が心のよりどころとし、辛さや苦しみに涙を浮かべ、いつか自由に帰ることが出来るよう想いを募らせています。

日本とロシアの双方が共に切り開いていく未来の北方領土を想像出来る日本になることを強く願います。バトンはずでに私達若い世代に手渡されているのですから。